

銀色の芽の一群が

神田由布子

からだも心も躍動を求めていた春
いてもたってもいられなかった季節

夏は駆け足で訪れ

光と熱の時間は瞬く間に過ぎ

ふと我に返ると、秋のただ中に佇んでいる

冬が近い

*

雪の舞う二月の空を仰ぐ

凍てつく大気が体内に流れ込む

凍え、枯れ、朽ちて、そのまま

消滅にむかうのみかと私は断念しかかっている

が、風と雪のやんだ翌朝

灰色の枝に思わぬものを発見する

小さな銀色の芽の一群が天を見上げている

純度の高い青を背景に、ささやかな銀色の群れ

葉の落ちた枝にかくれた生命の、細く、着実な流れ

すべてを拒むかのような冬のさなか

つぎの春への準備がひっそりとなされている

いのちの約束

ひかえめな銀色のあした

生きることの奥ゆき